

資 料

社会福祉援助技術現場実習のあり方に関する研究 — 障害児・者領域における4週間実習プログラムの試み —

山根 正夫* 由岐中佳代子** 平澤 紀子* 阿部 和彦*** 岸川 洋治***
 杉原 好則*** 中村 貴志*** 根ヶ山俊介*** 江口 敏一* 岡田 和敏*
 河野 健児* 堀田 和一* 木村 茂喜**** 文屋 典子** 佐野 幸子*****

<要 旨>

本研究は社会福祉援助技術現場実習の効果的なあり方について検討した。今回は4週間同一施設での現場実習を試み、その効果を明らかにするため①学生を対象とした実習全体についての総合評価、②実習先を対象とした4週間実習プログラムの課題と改善点、③学生を対象とした4週間プログラムの課題と改善点に関する3つの調査を実施した。各々の調査結果からは4週間プログラムの肯定的な評価が得られた。今後さらに4週間実習プログラムを効果的に実施していくためには前期実習終了後の指導の充実と、実習施設との連携体制の構築の必要性が示された。

キーワード：社会福祉援助技術現場実習 4週間プログラム 障害児・者施設

はじめに

西南女学院大学保健福祉学部福祉学科では、社会福祉士国家試験受験資格取得のための必修科目である「社会福祉援助技術現場実習（以下実習という）」について、2000年度より学生のアンケート調査の実施結果などに基づき効果的な実習のあり方を検討してきた。

これら一連のプロセスの中で、実習先の選択、実習形態、大学と実習先の連携、実習プログラムの構築などいくつかの課題が示された。とりわけ実習形態として、従来より実施してきた2週間で2か所、別の機関・施設での実習（以下2週間プログラムという）より、4週間同一機関・施設での実習プログラム（以下4週間プログラムという）の方が高い効果を期待できるのではないかという点があげられた（実習の変遷については表1のとおり）。そこで、2001年度実習では、実習機関・施設と大学との連携の強化を視野に入れ、連携がスムーズにいくと予測された障害児・者領域の実習で、4週間プログラム実習を試みた。

本研究では、障害児・者領域の実習に参加した学生と実習生受入に協力を得た実習施設の4週間プログラムに対する主観評価をもとに、4週間プログラムの課題と効果について検討することを目的とした。

I. 調査の概要

障害児・者領域における①実習前後の全般的な学生の実習に対する認識の変化、②実習生を受け入れる機関・施設の実習の受け止め方、および③実習後の学生の「4週間プログラム」の受け止め方についての3調査を実施した。

調査対象とされた2001年度実習は2001年6月18日～7月3日（前期実習）、11月5日～11月20日（後期実習）に行われた。また、対象学生は障害児・者領域において4週間プログラム実習に参加した25名の学生であり、実習学生の受入に協力を得た施設は7施設であった。25名の学生は、それぞれ障害児・者総合施設Sに12名、知的障害児通園施設Hに1名、知的障害児通園施設Yに2名、知的障害者通所更生施設Oに2名、重症心身障害児施設HRに1名、知的障害者入所更生施設Kに6名、知的障害者通所授産施設に1名が配属された。

1. 学生を対象とした実習全体についての総合評価に関する調査

1) 目的

4週間プログラムに参加した学生の自己評価を通して実習への認識変化を明らかにし、4週間プログラムの効果について検討することを目的とした。

* 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 助教授
 ** 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 助手
 *** 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 教授

**** 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 講師
 ***** 福岡女学院大学人間関係学部 人間関係学科 助教授

表1 社会福祉援助技術現場実習の変遷

| | 実習形態 | 実習地域 | 実習領域 |
|--------|----------------------|---------------------|---------------------------------------------------|
| 1998年度 | 分散実習 (前期6月・後期11月) | 北九州市中心 (他希望に応じて) | 希望に応じて (但し行政機関実習は1回) |
| 1999年度 | 分散実習 (前期6月・後期11月) | 北九州市中心 (他希望に応じて) | 希望に応じて (但し行政機関実習は1回) |
| 2000年度 | 分散実習 (前期6月・後期11月) | 北九州市中心 (他希望に応じて) | ①同領域2回の施設実習、②異領域の施設実習、③行政機関および施設実習を1回ずつ (いずれかを選択) |
| 2001年度 | 分散実習 (前期6月・後期11月) | 北九州市内限定 (例外あり) | ①同一施設実習、②同領域の施設実習2回、③行政機関と施設実習を1回ずつ (いずれかを選択) |

Table 1 .The change of social work practices.

2) 方法

障害児・者領域の施設において4週間プログラムに参加した学生25名を対象に2001年度実習の前期実習前の4月、前期実習後の7月、後期実習前の10月、後期実習後の11月の計4回、同一のアンケート調査を実施した。

調査の質問は、①実習配属先の理解として、障害児・者福祉の現状や制度、および配属先の支援に関する内容、②実習配属先の情報として、資料や情報の収集、配属先施設の機能や目的、利用者に関する内容、③実習の配慮事項として、実習先担当職員との打ち合わせ、利用者や職員と接する上での考慮に関する内容、④社会福祉援助技術としてアセスメントや援助計画の立案、援助方法などに関する内容、⑤介護技術として食事や入浴などの介助方法に関する内容、⑥実習への自信と不安として、実習や自身の能力に対する自信や不安、職員とのかかわり等に関する内容を含む6項目とした。

各項目の質問数は①実習配属先の理解を8問、②実習配属先の情報を4問、③実習の配慮事項を4問、④社会福祉援助技術を26問、⑤介護技術を21問、⑥実習への自信と不安を8問とした。また、項目ごとに学生の認識度を得点化するために、回答は「あてはまる」(4点)、「ややあてはまる」(3点)、「ややあてはまらない」(2点)、「あてはまらない」(1点)の4選択肢とし、認識度が高くなるほど高得点となるように設定した。

分析対象は4回のアンケート調査全てに回答があつ

た15名の調査票とした。

分析には、統計解析ソフトSPSSを用いた。各項目の選択肢の得点を間隔尺度とみなして、各項目ごとに、対応のある一元配置の分散分析により4回の評価期(前期実習前、前期実習後、後期実習前、後期実習後)における得点間の差の有意差について分析した。さらに、分析により有意差が認められた場合は多重比較を行った。

2. 実習先を対象とした4週間プログラムの課題と改善点に関する調査

1) 目的

4週間プログラムを実施する上での大学、および受け入れ施設側の条件整備事項について明らかにし、今後の課題を検討することを目的とした。

2) 方法

4週間プログラムでの実習学生の受入に協力を得た7施設のうち、4か所の施設長を対象に、後期実習終了後(11月)、4週間プログラムを効果的に実施するための条件などについて聞き取り調査を実施した。今回調査対象とした4施設は、障害児総合施設S、知的障害児通園施設H、知的障害児通園施設Y、知的障害者通所更生施設Oで、4週間プログラムの実施にあたり、本学と協同で実習プログラム内容の検討に協力を得た施設であった。

質問は①4週間プログラムの定着と発展のための改善点、②4週間プログラムの定着と発展に向けた困難点、③4週間プログラムのための準備、④4週間プロ

グラムのデメリット、⑤4週間プログラムのメリット、⑥社会福祉士養成のための実習としての配慮、⑦大学への要望に関する内容とした。

3. 学生を対象とした4週間プログラムの課題と改善点に関する調査

1) 目的

4週間プログラムに参加する上での大学、および学生側の条件整備事項について明らかにし、今後の課題を検討することを目的とした。

2) 方法

障害児・者領域における4週間プログラムに参加した25名の学生に対し、上記調査2と同一内容のアンケート調査を後期実習終了後(11月)に実施した。有効回答数は12であった。

II. 結果と考察

1. 学生を対象とした実習全体についての総合評価に関する調査

1) 結果

図1に、各項目ごとに4回の評価期における得点平均値を示した。

(1) 実習配属先の理解

4回の評価期において得点間の違いに有意差が認められた($F(3, 12)=29.659, p<.01$)。さらに、多重比較を行った結果、前期実習前とその他(前期実習後、後期実習前、後期実習後)との間に有意差が認められた($p<.05$)。

(2) 実習配属先の情報

4回の評価期において得点間の違いに有意差が認められた($F(3, 12)=5.376, p<.05$)。さらに、多重比較を行った結果、前期実習前とその他(前期実習後、後期実習前、後期実習後)との間に有意差が認められた($p<.05$)。

(3) 実習の配慮事項

4回の評価期において得点間の違いに有意差が認められた($F(3, 12)=34.233, p<.01$)。さらに、多重比較を行った結果、前期実習前とその他(前期実習後、後期実習前、後期実習後)、また後期実習前後と

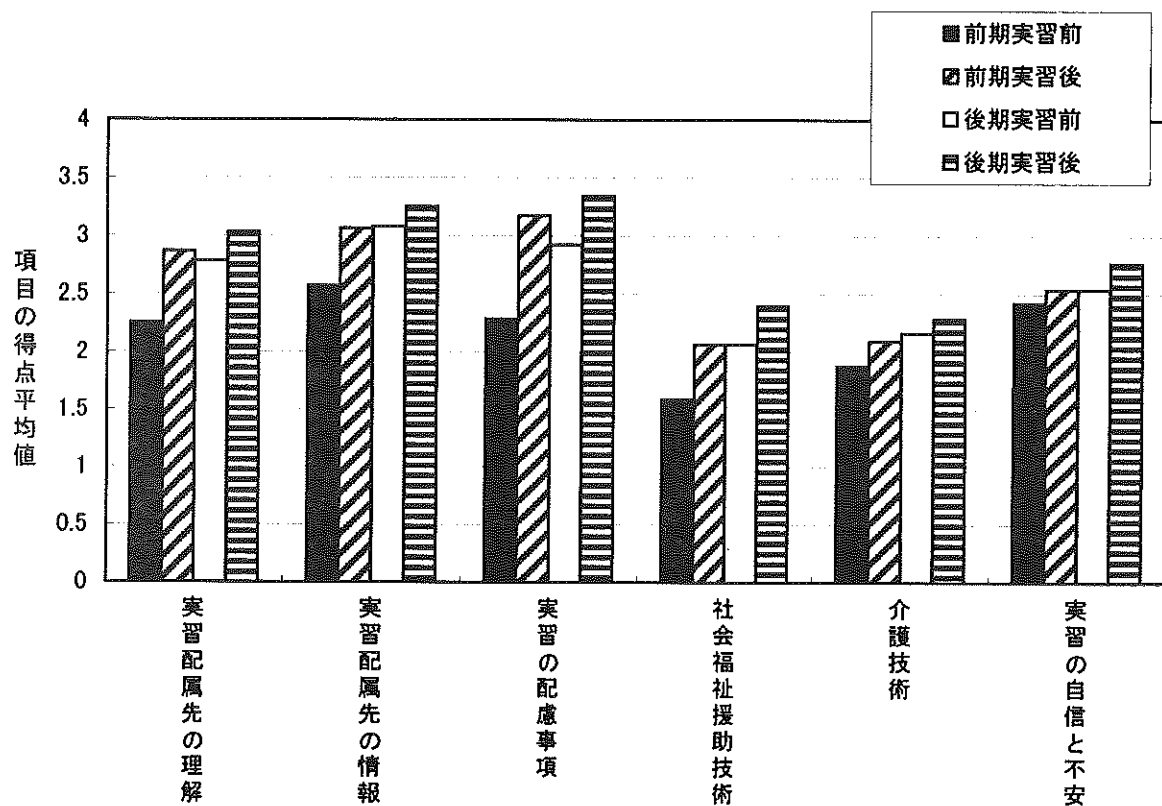


図1 4週間プログラムの各評価期における各項目の得点平均値

Fig.1 The mean of a score of each item in each evaluation period

の間に有意差が認められた ($p < .05$)。

(4) 社会福祉援助技術

4回の評価期において得点間の違いに有意差が認められた ($F(3, 12) = 24.635, p < .01$)。さらに、多重比較を行った結果、前期実習前とその他(前期実習後、後期実習前、後期実習後)、前期実習後と後期実習後、後期実習前後との間に有意差が認められた ($p < .05$)。

(5) 介護技術

4回の評価期において得点間の違いに有意傾向が認められた ($F(3, 12) = 2.823, p < .10$)。

(6) 実習への自信と不安

4回の評価期において得点間の違いに有意傾向が認められた ($F(3, 12) = 2.823, p < .10$)。

2) 考察

4回の調査結果から、前期実習前とその他(前期実習後、後期実習前、後期実習後)の間には、「実習の配慮事項」と「実習への自信と不安」に関する二項目を除いて得点の違いに有意差が認められた。この結果は、大学での指導と実習の体験を通して全般的に実習に関する認識が深まったことを示すものと考えられる。

一方、「実習への自信と不安」、「介護技術」の得点の違いに認められたのは有意傾向であった。

まず、「実習への自信と不安」については、実習後に学生自身が十分な実習の振り返りを行っていないこと、また大学の実習指導において学生の実習評価に対するフィードバック、および実習に対する疑問や不安の受け止めが十分ではなかったことも考えられる。さらに、施設側の学生を受け入れる体制や実習プログラムの有無なども関係してくるであろう。現在、大学の実習指導では、実習の終了後、施設から返却された実習評価票の開示と希望学生に対して実習に関する個別の相談を実施している。しかし、今後、4週間プログラムの中で学生の実習に対する自信を高め、不安を軽減させていくためには、実習のフィードバックを含め、実習指導者と学生とがより密にかかわることができる体制の構築、また施設との連携による実習内容の充実などが必要であろう。

次に、「介護技術」については、実習指導や関連講義の中で、必ずしも実習先で要求される介護技術が指導されていない現状がある。また、ボランティア経験や個人の技術なども多様である。さらに、実習中にどの程度介護にかかわれるプログラムであったかということも関係してくるであろう。したがって、今後は個人

の能力や経験と実習先のプログラム内容の多様性もふまえて、一定の指導内容をどのように確保していくかが課題となろう。

一方、「社会福祉援助技術」と「実習の配慮事項」については、前期実習前後と後期実習前後の得点の違いにも有意差が認められた。これは、学生が実際の現場や大学での学習の積み重ねによって、これらの項目に関する認識が高まったことを示すものであろう。

また、「実習の配慮事項」では、前期実習後より後期実習前に得点が下がった。これは4週間プログラムのため、後期実習前の実習先担当職員との打ち合わせや配慮事項に関する説明が前期実習前に比べ簡略化されたためであると考えられた。今後は、前期実習後と後期実習前の間にも、学生の認識が高まるよう、実習指導や事前打ち合わせのあり方等について検討が必要とされるであろう。

今回の調査結果については実習に臨んだ学生の事前の学習量やボランティア経験などを含んだ個人の技量、また施設側の指導内容との関連は詳細に分析していない。しかし、結果は概ね前後期の実習を通して学生の実習に対する認識は深まり4週間プログラムの効果を示すものであったと考えられた。今後、残された課題を検討し、より実習の効果を高めるために4週間プログラムの充実をはかる必要がある。

2. 実習先を対象とした4週間プログラムの課題と改善点に関する調査

1) 結果

(1) 「4週間実習の効果を定着させたり、さらに発展させるにはどのような点を改善していく必要があると思いますか。」

事前指導に関しては、「実習に際しての心構えや各自の実習の目標を話し合っておいて下さい(施設S)」「社会人としての自覚・基本姿勢、実習の目的の明確化、書類の記入についての指導(施設H)」

「施設での取り組みの事前指導、挨拶・返事をきちんと明瞭に聞こえる様、指導員へも積極的に声かけをすること(施設O)」「幼児対象の遊びや援助方法についての学習等があれば良い(施設Y)」などの指摘であった。

巡回指導については「前後期実習のうち一回は実習生の様子を見に来る事と一回は大学より指導者が来て講義(1時間位)もしくは実習生とディスカッションをしたらいかがでしょうか(施設S)」という回答であった。

実習プログラム（目標、内容、方法等）については「実習での学習内容を具体的に知らせてほしい（施設H）」「基本的な挨拶、目的を持って実習する（施設O）」という回答であった。

事後指導について「大学での講義と実際の福祉の仕事の違いを話し合い、施設にフィードバックして下さい（施設S）」「前期での実習の問題点を明確にし、後期へつなげる実習指導をして下さい（施設O、施設Y）」という指摘があった。

- (2)「4週間実習の効果を定着させたり、さらに発展させるには貴施設としてどのような点が困難であると思いますか。」

施設全体の実習に関する理解に関しては「全領域（全専門職科）に渡る実習を実施するには、各科の理解を得る事が必要（施設S）」「職員の業務が増え、負担に感じている職員もいる（施設H）」という回答が得られ、施設全体の実習に関する体制としては「各科との調整（施設S）」などがあげられた。また、施設の利用者に関する配慮としては、特に多人数の実習を依頼した施設Sから「実習する人数の検討としては12人から10人が限界」という回答を得た。

- (3)「4週間実習になって特別に準備したことはありますか。」

施設O、施設H、施設Yはとくに準備したことはないが、施設Sでは各専門職員に対して講義の依頼、受け入れる専門部署の所属長への説明、講義及び控え室の確保を実施した。

- (4)「4週間実習になって予想される困難なデメリットはありますか。」

施設O、施設Hは特にないが、施設Sは、「実習中の学生への講義の講師は各自の業務を持っているので調整が困難、実習担当職員が常時実習生についている事が不可能なので講義と講義の間の流れや各部所への移動等、上手く連絡が取れるのか不安があった。」また施設Hは、「社会福祉士養成のための実習のプログラムがなく、保育実習と変わりが無い。」という回答であった。

『その困難やデメリットについて、どのような解決策がありますか。』という問いに対しては、「大学の担当者と相談協議（施設S、施設H）」というものであった。

- (5)「4週間実習になって予想される効果やメリットはありますか。」

「実習生は集中講義にて施設Sの全体的システム、利用者の状況等、全般に渡って知識を得る事ができる。また体験実習により支援、介助方法の一部を体得することができる。前期で療育全体を学び、後期で処遇を中心とした実習は密度が濃いと感じる（施設S）」、「前期、後期と分けることにより、子どもの変化がとらえやすい。前期の反省点を学校へ持ち帰り、後期の実習がより効果的になると思われる（施設H）」、「継続して長期間実習することで、子どもへの対応技術が身に付く。前期での慣れで、後期実習がスムーズになる（施設Y）」という回答であり、さらに『どのような効果やメリットですか』という問いに対しては「学生の知識・技術の深化（施設R、施設H、施設O、施設Y）」「施設の受け入れ（施設O、施設Y）」「利用者の受け入れ（施設O、施設Y）」等の回答であった。

- (6)「社会福祉士養成の為の実習として特別に配慮された点はありますか。」

施設Hと施設Uは特にない。施設Sは「大学と協議してプログラムを作成した」。施設Oは「社会福祉士の養成で人権の意識を育てていく。成人として尊重した対応を」という点について特別な配慮がなされていた。

- (7)「実習に関して、大学への要望がありますか。」

この点に関しては「実習の目的をより明確にほしい（保育士養成の実習と、社会福祉士養成の違いについて等）（施設H）。実習生を送るにあたり、意欲のある学生の選別を行ってほしい。意欲に乏しい学生は施設職員の妨げになります（施設H）。幼児用の実践的な援助技術を多少心得ておくこと（施設Y）」等、シビアな回答が多かった。

2) 考察

4施設の調査からは、多くの示唆を得ることができた。まず、障害のある利用者とかかわる上での援助技術、中でも障害のある乳幼児そのものの援助法について指導が十分ではなかったことが明らかになった。また、援助技術以前の問題として、社会人としてのマナーや、実習の態度について学生に十分な指導が必要であることも同時に指摘され、今後の実習指導の大きな課題となった。

4週間同一施設における実習形態については、当初我々が予測した援助技術の深化が生じていることが明らかになったが、前述したとおり実習前後の指導の充実が不可欠である。また、実習訪問の際、実習生と短時間話し合う時間は確保しているが、施設の都合や訪問教員の都合で困難な場合も多く今後の検討課題として考えていく必要がある。

3. 学生を対象とした4週間プログラムの課題と改善点に関する調査

1) 結果

(1)「4週間実習の効果を定着させたり、さらに発展させるにはどのような点を改善していく必要があると思いますか。」

事前指導について、「日誌の書き方をもう少し教えて欲しい（施設H）。」、「もう少し、いろいろな対応方法を知っておく必要があった（施設K）。」、「問題行動が起こったときの援助方法（施設O）。」等の回答であった。

巡回指導について「巡回に来てもらっても、施設の人に聞かれずに話す場がなく、話しにくかった（施設HK）。」という回答があった。

実習プログラム（目標、内容、方法等）について綿密に準備された施設Sの実習生は「実習の目的・課題・具体的な方法について本人が自覚し、施設の先生方とのプログラム計画を行なっておいたほうが良いと思いました。2週間は一つの内容を定着させ、残りは個々人が興味があることが出来たらよいと思う。実習内容をさらに詳しく明確にする。新患者が、検査を受け、告知されるまでの一連の流れを見学させていただいたが、利用者にとってはいやだったと思う。そこは考えるべきだと思った。」という回答をしている。

事後指導に関して「前期の実習後、後期の実習に向けての指導が必要。実習終了後、その施設に行ったメンバーで反省会を行い、全員が思ったこと、学んだことを話し合うことができる時間を提供してほしい。最初の2週間が終わった後、きちんと目標が達成できたのか、次の2週間にこれを生かすためにはどうしたらいいのかについて（施設S）。」等の回答があり、実習前後の指導についての言及が多い。

(2)「4週間実習の効果を定着させたり、さらに発展させるには施設としてどのような点が困難であると思いますか。」

施設全体の实習に関する理解として、学生が感じ取った内容は、「忙しくてあまり実習生の相手をできない（施設O）。短期間で施設の全体を知るのには難しいと思う（施設K）。4週間だけでは施設全体を理解するのは困難である（施設HR）。」であった。

施設全体の实習に関する体制としては、「施設について知りたいことがあった場合のアプローチの方法、及び施設側の積極的な情報公開をしてもらえる信頼関係があった（施設S）。」という回答であった。

施設の実習プログラムとしては、「実習生のためのプログラムはなく、人手が足りないところに入る。漠然とプログラムをこなすのではなく、積極的に利用者に教わる技術を教えてもらいたかった（施設O）。」、「毎日作業に追われる（施設HK）。」というものであった。

(3)「4週間実習になって特別に準備したことはありますか。」

施設H、施設S、施設HKについては特にない。施設Oについては「前期実習では評価も悪く反省点も多かったの、それを生かして後期実習では積極的に学ぼうとすることを心がけた。」施設Kでは「前期と同じ結果ではいけないと思い、利用者との関わりを深めるために、いろいろな手段を使った。」「実習に行く施設の社会福祉施設としての位置づけ、利用者の状況、どのような活動を行っているのかを事前に学習した。（施設HR）」等であった。

(4)「4週間実習になって予想される困難なデメリットはありますか。」

施設S、施設O、施設HKについては特にないが、施設Sでは「他の障害者施設を知ることができないため、施設のあり方等を比べて学ぶことができない。他の施設での実習が行なえなかったの、就職などを考えるときにその一つの施設のイメージが強く影響されること（4週間以外にも、他の施設への実習の期間を作ったらよいと思った）。行政と施設では、やはり感じるものが違うから、理想とのギャップや理論を実践に結びつけることが行政だけでは困難になるのではないかと考える。制度と現場のギャップを実際にみることによって改めて考えることだってあると思う。2週間実習よりも狭い範囲を深く学ぶということとは出来ないという点。もし、自分の行きたい分野が明確であれば、すべての施設種別を回らなくても、一か所でもいいと思う。私は、すべての所を回れ

て満足だったが、そう思った。デメリットとして、他の施設はどういう機能があるのか、施設の違いがわからない。」等、様々な回答があった。同様に「一つの施設しかみることができない（施設H）。」、「自分の行きたい施設に行けない場合もあると思う（施設K）。」、「一つの施設だけではその施設のことがわからず、他の施設ではどのように取り組まれているのかを理解できない。また4週間実習では、他の施設との比較が出来ない（施設HR）。」等々の回答があった。

『困難やデメリットについて、どのような改善点がありますか。』という問いに対しては「大学の担当者と相談協議（施設S、施設K）。」であった。

(5)「4週間実習になって予想される効果やメリットはありますか。」

施設HKのみ否定的な回答であった。肯定的な回答としては「対象者の特徴や性格、名前の把握ができるし、ケースを持つ場合でも信頼関係が成立しやすい。また現場のスタッフとも仲良くなれるので、いろいろな裏話が聞けて今後のためとても有効だと思う。4週間という長期を同じ施設で実習することにより、施設での働きについても深く知ることができる。又、利用者の方ともじっくり関わることができる。その中で新たな目的や課題がでてくる。気持ち的に余裕をもてた気がした。施設全体を広く学ぶことが出来るという点。施設全体について詳しく理解できる。利用者とも深く関わることができる。施設に慣れる。施設の機能、役割が明確に理解できた。4週間の実習であったため、利用者とのコミュニケーションもよくとれて、本当の気持ちを聞くことができた部分が大きかった。最初の2週間は、慣れるだけで精一杯になり、なかなか目標の達成ができない可能性があるが、残りの2週間で、自分なりの目標も立てやすく、利用者との関わりも深まる。終わりの2週間は、施設のことが分かっているので、目標が立てやすい（施設S）。」、「子どもの成長をみることができる。知識を高めることができる。後期の実習は少し慣れているので動きやすい（施設H）。」、「前期実習の名誉挽回ができる。同じ施設に行くことで前期実習では見えなかったことが見えてくる。利用者が声をかけるようになってくれるからうれしい（施設O）。」、「4週間実習は利用者状況や施設状況が明確になってくる（施設K、施設HR）。」をあげている。

『どのような効果やメリットですか。』という問いには「学生の知識・技術の深化（施設S、施設H、施設O、施設K）。」があげられ、利用者の受け入れとしてのメリットを施設S、H、O、HRであげている。

(6)「社会福祉士養成の為の実習として特別に配慮された点はありますか。」

施設S、施設O、施設K、施設HK、施設HRは特になかったという回答で、施設Hは「実際の現場の事を多く理解させようとしていた。」、施設Sでは「専門用語については知っているという前提で話されていたが、分からないことについては丁寧にフォローしてくれた。」という回答を得た。

(7)「実習に関して、大学への要望がありますか。」

施設O、施設K、施設HRは特になかった。施設S、施設H、施設Rからは「車椅子介助をできるように、詳しく指導してほしい。重症心身障害児（者）通園事業では、毎日のように車椅子を使い、外に出ることが多く、車椅子を上手に使えないことで、利用者に不快な思いをさせてしまったから。4週間のプログラムでは、一つの施設の機能についてはとても学ぶことができる。しかし、他の分野（行政、老人、児童）の施設のことは全く分からなくて、不安な部分がある。実習全体報告会での発表を聞いて、他の施設の内容は少しは分かったが、もう少し、具体的に分かるような工夫をしていただけるとうれしい（施設S）。」、「事前学習の徹底。（施設H）」「大学が実習施設を選ぶのではなく、自分たちで選んだ方がよい。なぜなら自分の知りたいことや学びたいことをその施設でより理解ができるから（施設R）。」等の回答を得た。

2) 考察

学生への調査からは、他の施設のあり方等を学ぶことができず、一つの施設のイメージが強く影響される等の否定的な回答も目立ったが、これらは施設見学などでも補えるような内容で、社会福祉援助技術の深化と結びつくとは言い難い。一方、対象者の特徴や性格、名前の把握ができ、ケースを担当する場合でも信頼関係が成立しやすい、4週間という長期を同じ施設で実習することで施設の働きについて深く知ることができる、子どもの成長をみることができる等の肯定的回答や、前期の評価を踏まえた学習がなされている点は4週間プログラムの効果を示すものであると言えるであ

ろう。

謝 辞

Ⅲ. 総合考察

4週間プログラムの実施により、施設側、学生側からも肯定的な意見を得ることができ、学生自身の評価も前後期の実習を通じて高まった。しかし、いくつかの課題も示された。

今回の調査全般を通し、4週間プログラムの改善に向け、前期実習の問題点の明確化と後期実習の深化へ向けた大学側の指導の必要性が明らかになった。学生の実習自己評価では前期実習終了時から後期実習開始時にあまり変化がなく、現段階の本学における実習指導が後期実習を十分に深めるものとなっていないことを示唆していると考えられた。今後、前後期同一施設による4週間プログラムをより効果的に実施していくためには、前期実習が終了した際に大学における個別面接等を徹底し、前期実習の振り返りと後期実習へ向けた十分な計画と準備が必要とされる。また、施設側へも前期実習と後期実習の位置づけや目的を明確に提示し、それらに沿った詳細なプログラムを策定することが重要であると考えられた。

また、学生への指導としては、今回障害のある乳幼児への援助法の事前学習の必要性が施設側からあげられたように、実習の効果を高める条件として社会福祉援助技術全般とそれぞれの専門領域で求められる援助技術を習得しておくことが重要となろう。さらに、技術以前の問題として人とのかかわる上でのマナーを身につけることや意欲をもって実習に臨めるような動機付けなど、基本部分の指導の必要性も指摘されている。これはヒューマンサービスの根幹を成すものでもあり、実習前後の指導のみではなく、2年次からの実習や演習の講義を通して学ぶことができるようなプログラムの組み立てが必要とされるであろう。

最後に当初の課題でもある、実習現場の指導者との連携体制の構築の必要性については、大学の指導内容、前後期実習の位置づけや目的の提示、実習プログラム策定、実習終了後施設へのフィードバックの要望などが今回の調査からもあげられ、大学と施設とが両輪となった実習指導が不可欠であることが改めて示唆された。今後、4週間プログラムを形態だけの効果にとどめず、本研究によって明らかにされた課題について検討を深め、本学の実習体制の充実を目指したい。

本研究は2000年度、2001年度西南女学院大学共同研究費から助成を得て行われた。

調査実施にあたりご協力いただいた施設H、施設O、施設S、施設Yの施設長の皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 岡本榮一、小田兼三、竹内一夫、中嶋充洋、宮崎昭夫編：改訂福祉実習ハンドブック、中央法規、1999
- 2) 日本社会事業学校連盟・全国社会福祉協議会編：新・社会福祉施設現場実習指導マニュアル、全国社会福祉協議会、1999

A Study of Social Work Practices — A trial of a social work practices program for four weeks in a field of person with disabilities —

Masao Yamane Kayoko Yukinaka Noriko Hirasawa Kazuhiko Abe
Yoji Kishikawa Yoshinori Sugihara Takashi Nakamura Syunsuke Negayama
Toshikazu Eguchi Kazutoshi Okada Kenji Kawano Kazuichi Hotta
Shigeki Kimura Noriko Bunya Sachiko Sano

<Abstract>

The purpose of this study is to clarify the advantages of a four-week program of social work practices in the facilities for people with developmental disabilities.

We examined the effectiveness of the program in the three aspects stated below:

1. General evaluation of the program through questionnaire for the students
2. Issues to be improved from the viewpoint of the facility personnels
3. Issues to be improved from the participating students' viewpoint

We have obtained a positive evaluation of the four-week program from the results of each survey. In order to carry out this four-week program even more effectively from now, it was found necessary to give students more substantial trainings before and after the practice and to construct a partnership and cooperation system with the facilities concerned.

Key Words : social work practice, four-week program,
facilities for people with developmental disabilities